#Music

Human Nature

マドンナ

Album「Bedtime・Stories」
（1995 年）収録

ウィメンズ・マーチでも歌われる 女性蔑視へのアンサーソング。

マドンナは 1992 年に「Erotica」というアルバムと、「SEX」という写真集を発表。いずれも大胆な性表現に踏み込む作品だったが、この際、激しいバッシングを受ける。女性が性について自己表現することへの逆風を感じたという。こうした女性蔑視へのアンサーとして出したのが、1994 年の楽曲「Human Nature」である。“性について語っちゃいけないなんて知らなかった　自分の想いを語っちゃいけないなんて知らなかった　私は謝らない　これは人間の性だから ”。この曲は、2017 年にトランプ前大統領の女性蔑視な言動に対して行われたウィメンズ・マーチでも歌われており、今も強いメッセージを放っている。

 # フェミニズム・ジェンダー

Outside

マライア・キャリー

Album「Butterfly」（1987 年）収録

差別された経験から生まれた歌が 人々の「孤独」に寄り添い続ける。

黒人の父と白人の母との間に生まれたマライア・キャリーは、幼少期からひどい人種差別を受けた。また黒人と白人のバイレイシャルであるがゆえ、ブラックコミュニティにも居場所がなかったという。そんな孤独を 1997 年の「Outside」にて、“ 自分と同じような人間なんていないと感じる ” と歌っている。そして、どこにも属せず常に Outside（蚊帳の外）にいるようだと吐露した歌詞にシンパシーを感じたのは、彼女と同じ境遇の人だけではない。北京オリンピックのメダリストであり、2019 年にはゲイだとカミングアウトしたカーロン・クレメント選手も自分自身と重ね合わせたと語っており、様々な人々の孤独に寄り添い続けている。

#LGBTQ+　**# 人権・民族**

#Music

New Agenda

ジャネット・ジャクソン

Album「Janet」（1993 年）収録

黒人、女性…　二重の差別にも屈しない、ブラックフェミニズム史に刻まれる一曲。

メインストリームのフェミニズムが白人女性を基盤とする社会で、黒人女性という二重のマイノリティであるジャネット・ジャクソンは、それゆえ直面する壁も多々あったようだ。人種差別と性差別がメンタルヘルスに影響を与えたことも告白している。そんな彼女が 1993 年に自身の名を冠して出したアルバム「janet.」。その中の収録曲「New Agenda」で、こう宣言している。“ 自分の性別のせいで　私は何度もNOと言われてきた　自分の人種のせいで　私は何度もNOと言われてきた　でもNOと言われる度に私は強くなった　それがアフリカ系アメリカ人の女たる所以　誇り高く毅然と振る舞う ”。ブラックフェミニズム史に名を刻む、魂の歌だ。

フェミニズム・ジェンダー　# 人権・民族

Born This Way

レディー・ガガ

Album「Born This Way」（2011 年）収録

求められていないと感じる子供と、受け入れられることの難しさを知る大人のために。

LGBT コミュニティから支持を集めるアンセムは昔からたくさんあるが、歌詞内で明確に LGBT に関するワードを出し、なおかつ大ヒットさせたという意味で、レディー・ガガが 2011 年に出した「Born This Way」は特筆すべき楽曲である。自分らしくいることを美しいと称え、どんなマイノリティであろうと “ こうやって生まれたんだ ” と全肯定する歌詞は多くの人を勇気づけた。なお、2017 年のスーパーボウルにライブ出演した際も彼女はこの曲を歌っている。そのときに出した、“ 求められていないと感じる子供と、受け入れられることの難しさを知る大人のためにやる ” というコメントが全てを象徴しているのではないだろうか。

人権・民族　#LGBTQ+

#Music

©2004 AVEX INC.

my name’s WOMEN

浜崎あゆみ

Album「MY STORY」（2004 年）収録

マイノリティーの一部として発信し続ける「あゆ」の闘志の源流。

浜崎あゆみは長いキャリアを通し、フェミニズムにまつわる歌をいくつも出している。その中のひとつが 2004 年発表の「my name’s WOMEN」だ。自身が体験してきた女性蔑視的な扱いや風潮に、“ 都合よく存在してる訳じゃない ” と NO を突きつけた曲で、タイトル通り女性としての意思表明となっている。2017 年には SNS で “ 日本はどうしてこんなにもマイノリティへの理解がなかなか進まないのだろう（中略）、女性が男性社会で権力を持ち発言しようものならマイノリティーオピニオンだ、と。だったら私はマイノリティーの一部として発信し続けようじゃないの ” とも発言しており、彼女の闘志の源流をこの曲に見ることができる。

 # フェミニズム・ジェンダー

ライター

富岡すばる Subaru Tomioka

10 代の頃は自分がゲイであることを受け入れられず、陰鬱とした日々を過ごす。その反動で 20 代はゲイバーや SM バーで遊びまくり、やがて数度の整形を経験。その後ゲイ向けデートクラブを経て、ゲイ向け風俗店に勤務。30 代でフェミニズムに目覚め、ゲイとして感じた生きづらさと、男性として感じた特権性を二本柱に、“ 性 ” と向き合いライターとして雑誌などで連載中。